

花 筐 余 韻

—— 水上勉「名塩川」の原質 ——

辻 憲 男

Najiogawa and Hanagatami — A Note on Tsutomu Minakami —

Norio TSUJI

【要 旨】 水上勉の短編小説「名塩川」（一九六九年）の読解と批評。主として作品の結構と物語叙述について、また主

題と創作方法について考察し、その要点を記した。とりわけ下敷きになった謡曲「花筐」および在地の伝承と比較することにより、この作家の他の作品とも通底する主題的な原質、言うならば「女の情念と受苦」について私見を述べた。

【キーワード】 「名塩川」、水上勉、「花筐」、女の受苦

水上勉の小説「名塩川」は、昭和四十四年（一九六九）一月に「オール読物」に発表された。約五十枚の短編で、同年五月、講談社刊の作品集『翼（みぞれ）』に収められた。物語は一口に言えば、名塩紙の始祖と伝えられる東山弥右衛門なる男と、そのあとを追って越前から名塩へやって来た妻子の悲劇である。読後は、男の身勝手な生き方と、女の哀れな純情が強く印象づけられる。語り方も人物もひと筋に単純である。面白さの点はやや物足りないが、このような語りはむしろ日本古典の伝統に連なるものである。題材は作者にとって殊に愛着の深い紙漉きである。下敷きの一つになった能の「花筐」については作中人物を通して語られる。また五十二年刊の『水上勉全集』第8巻の「あとかぎ」に、

『名塩川』は、越前味真野につたわる「花筐」の謡曲から想を発した、これも私の絵空ごとである。大滝村の紙漉き家を訪ねた際、名塩からきた九右衛門の悲劇をきいた。故人となられた人間国宝岩野市兵衛さんからだいたが、越前の紙漉きが、名塩に生きて、九右衛門は、名塩紙の始祖となったが、越前へのこした妻子のことに思いを馳せて、「花筐」の物狂いとかさねてみたのだった。この作品は、私には好きな短編の一つといえるが、〔中略〕職人物の出世譚といえるが、その裏で泣いた女の業の物語は、いまでも興味のあるところで、旅をしていても、似た話があると、耳がたつのである。おそらく、「花筐」の作者も、そういう話をきいて、あのような華麗な物語を書いたのではあるまいか。

とあり（「九右衛門」は誤記か）、創作の動機が明かされている——もっとも、私見によれば、創作の道すじは右に言うほど簡単なものではない——。作中の弥右衛門は摂津名塩から出て、越前五箇で紙漉きを習い、その技術を得てひとりで逃亡した。四年後の安政二年（一八五五）三月、妻のおしんは娘かつを連れて名塩を訪ねるが、夫に会えないままに名塩川に身を投げる。「花筐」は狂乱した照日の前が最後にめでたく愛情を取り戻すという曲であるのに、これは力弱く絶望して死ぬ女の「物狂い」が芯になっている。名を残した男の話ではなく、「その裏で泣いた女の業の物

語」である。それは「花筐」作者の発想とはやはり異なるものであろう。言うならば、この「女の業」の主題は水上の諸作品に底流する、作家自身の原質に由来するものではあるまいか。男の不在と女の受苦という構図の典型は、これ以前には三十七年作の「越後つついし親不知」がある。前提に貧しい生活があり、同じ名の主人公「おしん」は健気に苦勞に耐えるが、結局は暗い運命によって死に追いやられる。またしても理不尽な悲劇である。「名塩川」は死に方は違っても、越後のおしんの生まれ変わりのような感じさえする。男が直接に手を下すのではないが、思いつめた女の情念がついに狂乱に陥るのである。人々の暮らしは長くそうした涙を織り込んできた。

全集本の本文二十五頁のうちは、

一 4頁、二 5頁、三 5頁、四 2頁、五 9頁

の五節に分かれ、左のように時と場所を短く区切っている。

一、大滝の母娘が父を捜しに村を出るまで。

二、弥右衛門が紙漉きを習うためにおしんと結婚し、やがて妻子を置いて逃亡したこと。

三、母娘が杉津に一泊して老夫婦に励まされたこと。

四、「花筐」の照日の前の話。

五、名塩に來たが弥右衛門に会うことができず、娘だけをやって、母は名塩川に入水したこと、および名塩泥入り紙の起こり。

本稿は以下、この語りの筋道をたどりながら、主として小説の主題と方法に注目して私なりの読解を試みることにした。

一 母と娘

物語の最初は、母娘が大滝の社に初詣でをるところである。山頂の社には、昔、男大迹皇子おおどのおうじに紙漉きを教えたという「紙づくりの始祖」、川上御前が祀られている。皇子はその後都へ上つて継体天皇となったが、以来、里人は皇子の残した紙漉きを習い覚えて生業としたのである。六つの娘が母に父の居所をたずねる。摂津まで行って「お父に会いたい」と言う。この時に母は「思い決した」(第四節)。そして「夫に会いにゆく遠い道のりの安穩」を神に念じた。母娘が人知れず村を出たのは三月の初めであつた。

この第一節にすでに、物語の重要な要素が書き込まれている。越前五箇の大滝は谷あいやあいの寒村である。摂津名塩も同じく「深い谷である」(第五節)。皇子は女神に紙漉きを教つた。水上の紀行文によると、その伝説は「ある日、狩獵に出て、大滝川の上流を歩いていたら、美しい娘に出あつた。娘は白帷子しろきを着て長い髪を束ねていた。皇子の前にすすみ出ると」、紙漉き法の実際をやつて見せた云々(2)というのである。神の恩頼によつて皇子は出世して去つた。踏み台にしたのではないが、それきりになつた女もいたであらう。あとに出る能の「花筐」には紙の話はなく、ただ「里の娘とねんごろになり、桜をかたみに都へ去つた」というのみである。

去つた男の話は小説のおしんには身につまされたに違いない。夫は紙漉きの秘法を得て姿を消した。もしそのため自分をだましたのなら尚更つらく悲しい。自分たちは神ではない。夫に追いつがる旅に出るしか道はない。「花筐」の場合は皇子の残した玉章たまぎと花籠がある。「おしんの場合は、形見はかつである」(第四節)。あとは難儀の道行きとなる。作者が選んだ場所はただ一つ、越後の親不知に似た北陸道の難所、杉津すぎづの坂であつた(第三節)。

二 弥右衛門の行状

語りは転じて八年前にさかのぼる。弥右衛門が名塩を出て越前で紙漉きを習い、四年後に妻子を置いて逃亡するまでの経緯である。かつはまだ二歳であった。

弥右衛門は二十三歳で美濃の仙人に出、一年目に景氣のよい越前の紙漉き村へ入った。名塩に妻子を残していた。「何とかして他国で身を立て、成功して帰って村人を救いたいと悲願をたてた」。大滝の市兵衛宅で働いたが、他国者には「肝心の簀桁をゆすって紙を漉く舟仕事、コウゾの餅にとろろあおいをまぜて、ねばりを入れる手加減は教えてもらえなかった」。藩の禁制である。男衆の一人がささやいた、「五箇の紙漉きおぼえたけりや、在の娘と一しょになれ。ここの住人になりや、市兵衛さんも教えて下さるわ」。「弥右衛門はどきりとして男の顔をみた」。故郷を離れたのは、山崩れで田畑を失い、飢饉で人々が死んだからだ。だが木樵は馬鹿らしくなった。紙漉きを覚えて帰れば、「疲弊した村も生きかえるかもしれぬ」。野心と望郷心から、重婚という非道の手段を選ぶのか。「罪なことだ。ここで嫁をもらえば、犬畜生といわれても仕方あるまい。どうしても出来ぬ。しかしついに「心を鬼にして」決心した。味真野のおしんは十九。「色白でぽっちゃりした、おたふく顔の、気の好きそうな娘であった」。祝言をあげ、一年しかつが生まれた。市兵衛は奥義を伝授し、かたがた夫婦に和合の道を教えた。おしんも市兵衛も疑わなかった。よく働いて、五箇で一番の腕達者といわれた。が、^ああの子ももう六つになろう。美濃へ出た日には、かつのような赤子^あやった^あの思いが頭をもたげた。秘法を盗み、五箇の人々を裏切って逃亡した。

弥右衛門はこれ以後姿を現さない。わずかに、終節の『撰津国名塩紙史考』なる書物に（言うまでもなく仮託の書である）、おしんの遺骸を見た時、「弥右衛門が越前に置きし妻の哀れなる最期に、心痛めしことの深きを知るべし」と出るのみである。『史考』の筆者に預けて、作者は弥右衛門の側に就かない。おしんの死を名塩泥入り紙の発明に

導くためである。そもそもこの小説は男の生き方には関心がない。男を弁護するのではないが、それよりも、越前から名塩へ「死にきた」哀れな母娘に涙をそそぐのである（後述）。

おしんが決心したのは、去年の秋に、京の紙問屋の番頭から名塩の東山弥右衛門の話聞いたからである。「越前とかわらぬ紙漉き法で、村に紙漉き教えて、いまは、名塩は紙どころとなってますかえていますそう……」（第三節）。事実、近世後期から幕末にかけて名塩製紙は藩札用紙の需要も多く、好況が続いた。小説はわずか三年半の間のこととしているが、安政二年三月は名塩中山にある紙祖碑建立の時を借りたのである。終節に建碑を「明治二年三月」としたのは、執筆時の『明治百年』に事寄せたのもあろう。

ここで名塩製紙の起源説についてひとまず概括しておく。『西宮市史』によると、従来、これに關しては、

①戦国時代末期、蓮如上人来錫のとき、上人の供をして越前より来住した人びとの手で、はじめて紙漉技術が伝えられた。

②その後、引きつづく越前の一向一揆の避難者により伝えられた。

③名塩の住民が木曾への杣木挽職出稼の途上、越前で習得して持ち帰った。

④名塩の東山弥右衛門がいつのころか越前に出かけて苦心の末その技術を盗み取って帰村、その紙祖となった。

（伝承）

⑤東山弥右衛門が木曾路にて杣稼をしていたとき、その名声を聞き越前に入って製紙技術を習得して帰村、はじめて名塩で紙漉を開始したという前二者の折衷説。

などの諸説があり、いずれも越前からの移入を説いている（摘要。ただし③の「越前」は『市史』の誤解³）。水上の小説は、端緒は前引の岩野氏の直話であったのだろうが、筋立ては⑤の中山琇静『名塩紙』の所説に近い。問題は④の東山弥右衛門である。名塩中山に現存する報恩碑には、

紙職元祖／東山弥右衛門碑文／夫塩山製紙之興哉久矣。授其法者弥右衛門之祖也。然未審年曆。其裔孫釈淨證者以天明九年十月十二日歿。中此時絶其祀矣。呼々哀哉。塩山数百戸雖農工商賈無不蒙彼沢者。故今議製紙之徒以建斯碑。而今而後欲酬其恩者以於終配于始応以十月十二日為紀。是追遠之謂乎。／安政二年乙卯三月建之／檀那源照寺託円誌

とある（改行句読は中山氏による。返点を省き、傍点二字を他書により訂した）。弥右衛門なる姓の家は何世かの後、天明九年（一七八九）に血筋が絶えた。しかしその姓の男が「紙祖」であるとはそれ以前の文献には全く見えない。あるいは水上も披見したかもしれない『西宮市史』の執筆者でさえ、「ただ突如として安政二年の建碑にさいして、かがが当地紙職の元祖としてしるされてくるのである。これはどういうことなのであるうか」と疑問を呈している。加えて別に「紙職元祖石碑之記」なる教行寺文書があり、元祖碑と東山（地名）・弥右衛門（姓）との關係を截然と弁別している。いったい初代弥右衛門はいかなる人物なのか。『西宮市史』以前の公的な文献『有馬郡誌』は、上巻の「紙職之祖東山弥右衛門」の項に、

翁は現今の名塩製紙の元祖にして文明年間、居村耕地の少きを患へ、副業の創始に、苦心の結果遙々越前国に至り、製紙業を修得せんとしたるに、当時技術の秘密を他に奪はるゝを虞れ、之れが職工見習を拒絶せらる。弥右衛門失望落膽の末、遂に一案を回らし、某家養子縁組を決行し、子女三名を挙げたり。爰に於て初志を貫く機会を得、人知れず昼研究を重ね、埴紙万般の製法秘密を収得し、其の技に長じ、在越十三年間にして目的を達し、帰郷するや、村民に斯業伝授をなし終に名塩製紙の盛大を来せるなりき。されば製紙業者は、今尚は翁の徳を敬慕し、年々十月十二日の命日には、供養謝恩の大祭を行ひつゝあり。

と記す。⁽⁵⁾「文明年間」「子女三名」「在越十三年間」等は口碑に基づくものであろうか。ともあれ弥右衛門は本心を偽り、村人のために秘密を盗んだというのである。その妻子にまつわる話は見えないが、右のような伝承は存外古く近

世初期にまで溯るものようである。それらに關しては、この稿の終わりにまとめて述べることにしよう。

さて、能の「花筐」の構成は、初めに越前の照日の前（シテ）が皇子の残した手紙を読んで悲しみ、形見の花筐とともに胸に抱いて里に帰る（中人）。季節は春である。次はその秋九月、大和の天皇となった皇子（子方）と廷臣ら（ワキ・ワキツレ）が紅葉見物に出かける場面となる。御代榮え、めでたく万代を寿ぐ詞章である。この二場の鮮やかな対置は、水上の小説にも生かされたごとくである。もっとも現在能は過去に戻らないし、設定も季節も同じではない。しかし愛されない女の悲しみは深く同質である。男が幸せであれば尚更苦しみに身をさいなまれる。氣丈夫な照日の前さえ半年の間に狂女となる。対しておしんは四年の間に打ちひしがれ、漸くに思い屈して心弱くなっていく。

三 杉津の老夫婦

道行きは、一日目の夕暮れが現在形で語られる。母娘は今庄から山中七里を越え、杉津の難所へさしかかる。「日は暮れかけている」「歩き方が心もとない。海風のはげしい磯づたいの道である。それでも母娘は氣丈に山に向って急いでいる」。村はずれの一軒家を見つけて一夜の宿を乞う。おしんはぼつりぼつりと身の上話をする。「聞き終って、老夫婦はため息をつき、かわいそうな母娘がいるものだと思う」。子が寝てから、老亭主は「きつと……会える。氣弱にならないで、旅をつづけなさい」と力づける。「杉津の坂は照日の前が通られた縁起のよい道じゃ」「娘さんは氣がふれて、皇子さまの残した花筐を手に都へのぼりなさる……」「帝となられた皇子さまの眼にとまる」「氣のふれていた娘さんは、正氣にもどって、帝のお后になられたそうな」「おぬしも夫に会えば、きつとしあわせになれよう……」。おしんはむせび泣いた。翌朝、宿の代にと出した五文錢を夫婦は受け取らなかった。紙漉きの簀編みの錢であった。この老夫婦だけが、哀れなおしんを思いやることのできる人物である。小説ではこの人の情けだけがあたかな救いである。第五節の、おしんを追い払う村人らの冷たい仕打ちとは大きな違いがある。おしんは照日の前のような氣

丈夫さを持たない。

四 「花筐」の照日の前

「花筐」では、狂女の姿の照日の前（後シテ）が、侍女（ツレ）を伴って再登場する。花籠は皇子が「朝ごとの神殿のお勤めに、花を手向けて礼拝した時の形見である」。狂女が肌身離さず持っていた。旅人に道を尋ねるが「物狂ひ」だとして教えない。されば南へ向かう雁を頼りしよう。「味真野の娘が、狂女になって、花籠を手にと都へのぼる道中は美しい」。その引用がある、「玉章を、付けし南の都路に……君が住む越の白山知らねども……大和なる、玉穂の都に急ぐなり」、「ここは近江の湖なれや……野くれ山くれ露分けて、玉穂の宮に着きにけり」。この道中に次第に狂恋の情念があらわになる。

対して「おしんの場合」は、形見はかつてある。子をつれてゆけば、鬼の夫といえど追いかえしはしないだろう、という、女らしい心頼みがある。気丈な子に心を動かされた。子は昨日よりも足取りが軽い。「母はやもするとおくれをとる。息せいては、子のうしろを足早めて、てくてくと杉津の山をのぼりつめる」。おしんはまだ狂乱していない。二日目は敦賀から有乳の関を越え、近江塩津泊まりである。小説もまさしく越と近江の地名を出している。⁽⁹⁾

「名塩川」は単に「花筐」から想を得ただけの「絵空ごと」ではない。何よりも終節のつくり方は、それが小説の主要部であるだけに、謡曲とは決然と袂を別っている。最後は「花筐の味真野娘はしあわせであったといわねばならぬ」（第五節）。ただし作者は触れないが、照日にも受苦と恨みはあった。御幸の行列の前に狂い出て、侍女の持つ花籠を打ち落とされる。「あら忌まはしのおん事や候」。問われてこれは皇子の花筐であるから、「われよりもなほ物狂ひよ。恐ろしや、恐ろしや」と非難する。「まだ散りもせぬ花筐を、荒けなやあらかねの、土に落とし給はば、天の咎めも忽ちに、罰当たり給ひて、わがごとくなる狂気して、ともの物狂ひと、言はれさせ給ふな、人に言はれさせ給

ふな」。単に託言（かごと 籠とかける）を言うのではない、忘れ形見の花籠までもなつかしく恋しいのだ、そうして心乱れ、天の月を望む猿のように叫び伏して泣いていたのだ、と訴える。——なお狂え、舞い遊びを観覧あるぞ。照日の舞はさらに李夫人の故事となる。「また李夫人は好色の、花のよそはひ衰へて、萎るる露の床の上、塵の鏡の影を恥ぢて、終に帝に見え給はずして去り給ふ」。この部分はもと独立の謡い物であったというが、照日の狂恋をますます強く演出する効果がある。

形見を軽んじるような男を、女ならば恨むのが当然であろう。だが味真野のおしんは恨み言を言わず、李夫人のように孤独に死んでゆく。純情なおしんは弥右衛門に先に妻子があったとは知らない。重婚は小説独自の設定である。「名塩へ帰ってから夫は新しい妻をもらったのではないか」と、いま名塩へ来て、冷たくあしらわれ追い返されて、おしんはやつとそう思う。けれども最後まで親子三人のあたたかい暮らしを夢見ている（第五節）。春の狂気から、不意に桜の幻想に吸いこまれた。引き上げられた遺骸は悲しい顔をしていたのではなかったか。哀れに美しかったであろうか。衣類は桜の花かと思まがうばかりの泥土で飾られた。それがおしんの残した花形見であった。

五 名塩川の桜

川岸の桜はうす桃色の蕾で、「もう十日もすると、咲きさかるだろう。その一本の大きな桜の根もとに、母娘はいま力なく腰をおとして休んでいる。意外なことであつた。村の誰にきいても、東山弥右衛門という人はいまこの在におらぬといった」。村に入れなかった。「おしんは、ここまできて、がっかりした。同時にもう根もつきはてた」。どの村人も冷酷なのが不審である。口惜しくもある。もう一度「髪ふり乱して」道を登ったが、いっそうひどく罵られ追い返される。弥右衛門は美濃で貧乏をしているという。おしんは途方にくれる。これから越前へ戻る気力もない。「来る道は、夫に会える喜びにふるえていたから力も出たものを、ここで会えぬとなれば、もう先は真っ暗である。

おしんは、子をひきよせ、頭を抱いた。大粒の涙をいくども落して泣きむせんだ。

いっそのこと、子だけをここに残して、ひとり越前へ帰ろう。「お前がゆけば会うてくれるじゃろ」、五文銭を握らせてかつを行かせた。その間、「自分は、どこかへかくれていよう」「おしんは狂乱のようになってかくれる場所をさがした」。水面に「美しい花ざかりの桜がうつっている」。

おしんは、美しい桜だと思った。と、そのとたんに、水の底にしずんでゆけば、温かい春が待っているような気がした。そこに夫もかつも待っているような気がした。これは、突然のことであった。水に身を投げるといいうような気持はなかったのである。美しい花のういた水床をくぐると、暖かい春が待っていると思っただけにすぎない。おしんは岸にしゃがんで、しばらくじっと、水面にうつる自分の影と、背中へかぶさるように枝をたわめる山桜の影を眺めやっていたが、やがて吸いこまれるように足をずらせると、するすると岸をすべて水に堕ちていった。

ここに至るまでの語りは丁寧で自然である。死ぬのではなく、子を生かそうと思う。思案がついた時、心は正氣を失った。「美濃にいるのやもしれぬ」とか「何かの理由で、越前の妻には会えないのであろう」とか「あの男どもが、またかつも追いかえすのでないか」とか、おしんは錯乱した。照日の場合は狂乱の舞が帝の目にとまる。恨みを忘れ、狂気をとどめれば元のごとく召し使おうぞ。能作者は李夫人を引きながら、結末を帝に会わないで死ぬというふうには作らなかった。が、おしんは会えないままに死んでゆく。小説作者は救わない。物狂いが紙の上に花開く。仮託の『史考』に、

ある人のいふ、越前より訪ねし、かつなる少女の言へるをききて、桜土堤に戻りしに、すでに母おしんの姿なく、路端に置かれし、ふり分け荷のあるをみて、投身せしと気づき、村人をたのみて、遺骸をひきあぐるに、おしんが衣類につきたる名塩の泥土の、桜の花かと見まがふばかりなるを見て、紙舟に土を入るを思ひつきたりとぞ。

と言ひ、「名塩泥入り紙はおしんが教へてかつが漉きしといへるもまたむべなり」「かつは父の名もよびかぬる名塩村に住みて、漉き女として、母の業をつぎたるもかなし」と語らせるのが水上流の結び方である。かつは生きた、そのことでおしんの生命を桜に救ひ取る。⁽¹⁰⁾それが小説の方法である。ただ一つ事実と違ふのは、名塩が男の紙漉きであることである。『史考』に「紙漉きは女の業にて」「越前も摂津もかはることなし」とあるというのは、それが仮託の書物であることを露呈する。

村人らはみな母娘を冷酷に追い返した。生業を守るためにやむなく結託したのである。ただおかつひとりをも父に会わせずに追い返されるのではないかと、おしんは物陰に隠れようとした。語りの最後もまた無情である。「けれども、弥右衛門の墓石の近くのどこをさがしても、おしんやかつの墓にめぐりあうことは出来ない。名塩の村人は越前の母娘を、無縁塔にさえ葬らなかつたのであらうか」。母娘の寂しい情念は行き場もなく異郷の川底に眠っている。

*

さて、近年刊行された名塩会編著『名塩史』は、言わば名塩紙業史の集大成である。⁽¹¹⁾その中に東山弥右衛門に関する考説があり、水上の「名塩川」についても一言触れた箇所がある。その前後に次の二つの文献が引用されている。一つは中山氏前掲書の「名塩教行寺文書より引用された」記事、

『何時の頃にや東山弥右衛門といへる仁あり若くして越前に到りさる製紙家の婿養子となつて製紙の法を習得す。習ひ得て後、妻子を置き去りて郷里名塩に帰る。これより名塩の地に紙を出す。然るに妻女弥右衛門の跡を慕ひて来たりしに里人之を追うて村に入れず。妻女その無情を恨み「村に癪者絶やさず」と呪ひ言^{ゴト}して死す。』

である。⁽¹²⁾これは最後の「呪ひ言」の部分以外は、水上の小説とよく似ている。ただし実際に中山氏の『名塩紙』に就いて見ると、どうしたことか右の一条は「今も尚邑人の間に」伝えている「口碑」の由である。教行寺文書からの引

用ではない。

二つ目は、億川撰三が研究会誌「医譚」に紹介した、

「弥右衛門が越前で養子となつて製紙を習つて居る時、其家の醜い顔の老母は一日弥右衛門に向つて、お前は紙の製法を盗みに来たのであるまいな、もしそんな事をすれば、お前にたゝるぞや、お前が国で製法を始めたなら、業病に罹つて村にも居られぬやうにしてやる、と恐ろしげに云ふた、そして弥右衛門が帰国し村に製紙の法を伝えて幾年か経た後に、癩病になつたので、老婆の呪ひの言葉を思ひ起し、越前に捨て去りし妻子の恨を想ひ、自分の罪障消滅を祈らん為に四国遍路に出て行つた、そして何の日、何の地とも知れずに此世を去つた、名塩に残りし子も成長して父の業を継だがやがて之も癩病にかゝり父の後を追ふて遍路に出て行つた。」

との伝承である⁽¹³⁾。ただし『名塩史』は傍線部分を脱落している。『名塩史』はそのあと、これらの説話について、同様の伝承が陶業地瀬戸にも伝えられているので、いずれも「業祖といわれる人物にまつわる類型的な伝承である」とみてよい」とし、癩者説にはそれ以上立ち入っていない。而して同書筆者の結論的な「推測」は、要約すれば、宝暦・明和年間（一七五一―一七二一）、越前岡本村では大凶作と紙業不振により没落する者が続出した、或る弥右衛門姓の一家は「その没落に耐えきれずして一家をあげて村落ちし」、名塩へ転住した、弥右衛門は「名塩製紙を指導し、その向上や発展に尽くし」、幾年か貢献したが、その後、

わずか数年の間に両親と愛児二人に死別した。そこで人の世の無情を感じて、旦那寺源照寺に永代経を奉納してその菩提を弔い、今更故郷には帰れず、妻がいたならば共に四国遍路へ出ていったかもしれない。しかしその功績は紙職仲間から長く感謝されたのであり、それが時代が過ぎると、いつしか紙祖のように思われ、安政二年（一八五五）にその紙職元祖碑が建立された。以上のことは筆者の臆断である。

というのである。つまり弥右衛門は越前出身の紙職人であり、名塩に来て紙業繁盛した後に、一家が死に絶えたとい

う説である。最後の、四国遍路に出た（その後は消息が知れない）という点のみは、前掲の伝承と符節を合わせた「想像」説となっている。

億川氏は名塩出身の医師で、先の論説は「第十五回日本癩学会総会演説」との由である。氏は冒頭に、「私が茲に申述べんとする処は、一人の癩人が起した産業の為に一村の人民に三百年間の生活が与へられ、今も尚ほ続けられつゝあると云ふ話であります」と述べる。そしてよく知られた「村の古老の口碑」の第一、

何時の頃にか東山弥右衛門なる村民あり、追々増殖する村の人口を支ゆる生業を起さん為め、越前国五箇庄に到り或る製紙家の職工となりて其業を習はんとせしも教へざりければ、其養子となりて紙の製法を学び、一夜、妻子を置き去りにして名塩村に帰りて製紙を創む。

を紹介し、次いで「村人の間にのみ知られて他郷の人には秘められてゐる第二の伝説」、即ち先の老婆の話を紹介する。以下氏の所説を摘記すれば、「此の伝説は古来村人の間に語り伝へられてをりますが、私も此説の真実なる事を信じておるものであります」。紙漉きは「手の皮膚を損傷し易く」「感染の好誘因」となり、「弥右衛門は多分越前で感染し、そして帰国の後製紙を始め、幾年の後、其業が稍や盛になつてきた日に発病したものであらふ。実に彼は村民の為に身を癩の病魔に捧げたのである」。名塩の人々は日当たりの良くない溪谷の中に生活し、「結核患者が甚だ多いやう」であるが、「癩は遍路に出るので村に住む者少く」なつた、云々⁽¹⁴⁾とある。

また中山氏は名塩教行寺の住職で、名塩紙について造詣の深い史家である。その『名塩紙』の跋は寿岳文章が寄せた。それより前、文章氏の『紙漉村旅日記』⁽¹⁵⁾の昭和十三年の条に、

名塩の紙は、もと当村東山に住んでゐた弥右衛門に始まると言はれ、安政二年に紙漉職が建てた弥右衛門頌徳碑も村の西端の中山に在るが、弥右衛門がいつ頃の人であるかは判らない。伝説では、弥右衛門年少の頃越前に行き、さる紙漉家の養子となつて製法を覚えたのち、妻子を置き去りにして名塩へ帰り、村民に紙漉を教へた。こ

のために田畑に恵まれぬ名塩の村の生計が立派に立つやうになった。弥右衛門に捨てられた妻は子供をつれ、夫を尋ねて諸国を流浪するうち、はからずも名塩に夫があることを聞きつけ、やつてくる。しかるに難が村に振りかかることを恐れた里人は、弥右衛門は居ぬと言つて妻女を追ひ返した。村人の無情の仕打ちに分別を失つた妻女は、わが恨みによりこの村に癪者絶えまじと呪つて死んだ。果して弥右衛門始め続々と村に癪者が出来た。

——この話は、名塩出身で大阪に在住し、緒方洪庵の室八重子の実家に当る億川医師からも聞いたことがある。

また一説に、秀吉が播州三木城主別所小三郎を攻めた時、因縁あつて名塩村民が杣木挽諸国経回免許の御朱印を秀吉から貰ひ、村民某が木曾路へ出稼ぎ中、同地で紙漉を習つてきたとも言ふ。いづれにしても江戸時代の初期既にこの製紙が著名であつたのは、「毛吹草」などの俳書に出てゐることから推察せられる。幸ひ教行寺の現住中山琇静氏は、国史専攻の士、三田中学校に教鞭を執る傍ら、名塩抄紙史の編纂を志してゐらるゝゆゑ、いづれ詳細を同氏の著述によつて窺ふ日が来よう。

とある。同氏は翌年越前大滝を訪れ岩野市兵衛とも会っているが、名塩の弥右衛門の話題は出なかつたものようである。いづれにしても、右の文中の「難が村に振りかかることを恐れた里人は、弥右衛門は居ぬと言つて妻女を追ひ返した。村人の無情の仕打ちに分別を失つた妻女は」のあたり、水上の小説の叙述に最もよく似ている。そのあとの「わが恨みにより」以下の癪者の話は小説には見えない。小説は伝説の再話ではない。水上は水上らしい別の結末を用意した。

といった口碑伝説の類がどれほど事実を伝えているかについては、さまざまな見解があり得よう。先の安政二年建立の紙祖碑によれば、東山の弥右衛門姓の家筋は天明九年（一七八九）に釈浄證を限りに断絶したという。六十六年前である。浄證の享年がわからないが、「裔孫」と言うからには、確かに先祖はさらにその数十年前ないし百年以上前に生存していたことになる。この年数は往昔を知る者が誰一人いなくなる長さである。加えて氣掛かりなのは前掲

「紙職元祖石碑之記」(注4)の何か敬遠的なよそしい態度である。それはこの建碑が弥右衛門の実の墓とは無関係であることを、殊更に強調するもののように見える。曰く、弥右衛門の審らかなる事を知らず、分骨にはあらず、東山には預かり知る事にあらず。そのような事実を明記して残す。紙祖の家筋一つを他の紙漉き家から切り離そうとする意図がある。

小説作者はおしんだけでなく、かつも名塩で生を終えたとする。先の億川説の第二の伝説と同じである。弥右衛門は人倫を踏み破り、母娘に苦しみを負わせた。弥右衛門ひとりが幸せになるうはずがない。事実、伝承上の弥右衛門のあしらいは右のごとくであったし、子孫が栄えたというような形跡もない。作者としてはせめても、「川底の春に、母娘が抱きあって眠っている気がしてならない」と結ぶほかなかったのであろう。恨みによる呪いとか罪障消滅のための四国遍路⁽¹⁶⁾とかは、もとより小説家の採る骨法ではない。主題はただ一つ、女の情念と受苦である。紙漉きの生業に沈んだ名もない女の慟哭である。

注

(1) 越前味真野は福井県武生市、大滝は今立郡今立町(旧岡本村)、現在とはともに越前市。大滝の紙漉きは水上の同時期の連載小説『弥陀の舞』に詳しく描かれる(『週刊朝日』四十三年三月、四十四年二月)。名塩は摂津有馬郡、いま兵庫県西宮市。なお東山九右衛門なる人物も文政年間に実在した(注3『西宮市史』第二巻、昭和三十五年)。

(2) 紀行文『越前和紙と美濃朱傘』、「太陽」昭和四十三年十月号(「名塩川」より少し前の執筆であろう)。のち『失われゆくもの』に収める。川上御前の伝説は所により少異があるが、いま『岡本村史 本篇』昭和三十一年によると、次のごとし。男大迹皇子が「ある日、岡太川の上流、水清き宮ヶ谷に女神と思われる非常にやんごとなき一女腹があらわれ、この村里は谷間であって田畠少く、生計を立てることはむづかしいが、清らかな谷水に恵まれているから紙を漉けばよいであろうと、自ら上衣を脱いで竿頭に懸け、紙漉きの業を懇ろに教えた。そこで伝習を受けて非常に喜んだ村人達が名を尋ねると、ただ岡太川の川上に住む者と答えただけで消えてしまった。以来村人はこの女神の尊容を川上御前と崇めて、岡太神社を建てて

奉祀し、又その教示に違ふことなく紙漉の業を伝えて今日に至っているものであるという。

- (3)『西宮市史』第二卷、昭和三十五年の「山村の手工業」。執筆は渡辺久雄・作道洋太郎。①の蓮如来錫は文明七年（一四七五）、また③の杣木挽免許は事実とすれば天正八年（一五八〇）以後のことである。⑤は中山秀静「名塩紙」、和紙研究会、昭和二十二年の所説。なお③の文献は、中山氏によれば安永四年（一七七五）狂雲舎染風著「塩溪風土略記并ニ八景発句」。原文に「木下藤吉郎秀吉織田信長の命に依て播州三木別所小三郎則光を征伐の時此所に来り玉ひしを村民之を拒て容易に通さず。中にも藤田何某寺内何某等勇力を顯せしにより秀吉道を枉けて彼所に趣征伐し玉ひ帰陣の節此村に至り郷民の勇猛を却て感し玉ひ賞を乞ふべしとありしに其比村民の稼尾州木曾山に入り杣木挽を職とす。因て杣木挽諸国経回免許の御朱印を願ひ頂戴して今に残れり。当時産業の紙漉職は其節木曾路にて習ひ得しとなり。」とあり、木曾路説である。

- (4)中山氏著によれば次のごとし。「一、当所紙職の濫觴ハ数百年を経て元祖の家断絶せしかハ其審なる事を知らず、故ニ其子孫の終を取て元祖の忘日となさるふ。／＼一、元祖弥右衛門之美の墓ハ東山にあり、是ハ唯紙職仲間より其恩徳を思ふて、建立せしみの事にして分骨せしにもあらず。檀那より法名を請けて納しとの事にして少も東山に預り知る事にハあるべからず。／＼一、東山といふハ其家の氏系図にてハあらず。弥右衛門の住居せし土地の名也。其外何処に住居して東山と名乗とも紙職の家筋にあらざればゆるす事あるべからず。是則往古よりの規格也。能々遂吟味末代迄も堅く約束を乱すべからず。」文中「忘日」は「忌日」の誤り。

- (5)『有馬郡誌』上巻、昭和四年（引用は同四十九年複製版による）。なお同下巻「塩瀬村」の「工業」の項にも、「製紙は、本村民の発明に係り、他に類例なき特産品を出す。元祖は東山弥右衛門にして、今を距る四百余年前、農耕少くして生業に困難なるを憂へ、单身越前に行き、十三ヶ年の歳月を費して、鳥の子紙・奉書紙等の製法を習得し、歸りて斯の業を創めたり。後日原料の中へ泥土を混合することを発明せり。之は紙質に変化を来し、他紙の及ばざる特徴を有す。例へば、試みに西洋紙等を室内に貼付し置かば、一ヶ月に足らずして既に変色して焦茶色を呈するに至らん。されど泥土を混じたる名塩紙は、永く其の色を保ち、且つ其の色沢は、鮮明なる反射的光沢はなけれども、何となく高尚優美なる感を起さしむ。是れ間似合紙の名の起りし所以なり」云々とある。泥土の混合も弥右衛門の発明とするのである。

- (6)岩波古典大系『謡曲集・上』昭和三十五年の「花筐」解説。その「主題」の項に、「恋慕の物狂いだが、天皇と女御の在野時代の恋という点が特色で、とかく理窟をいう能の狂女の中でも、特に気丈夫な女性として描いている。これを偽りの物狂いとする説が後世生まれたのも、そのためか」とある。「名塩川」の中にも類似的記述があり（第四節）、水上はこれを参考に

したかと思われる。

- (7) 今庄と敦賀の間、日本海に臨む中世以降の集落。杉津は水津。明治期に敦賀道が整備され、旧北陸本線の駅が置かれた。現在、敦賀市杉津。国道8号線が通じる。地形図は『日本図誌大系・中部Ⅱ』昭和四十九年を参照。なお万葉地理研究では、この今庄は杉津より五幡と敦賀の道が、東の木ノ芽道より早く開けたとする説が有力。杉津と敦賀間は舟によることも多かった。

- (8) 老亭主はおしんに、照日の前の幸運にあやかるよう話して聞かせた。もっとも再会後の照日の前が「安閑天皇のおん母君」になったという話は、謡曲の「安閑留」（女御留）という特殊演出のみの詞章であり（前掲岩波大系頭注）、他に文証もない。典拠というわけではないが、参考までに日本書紀継体紀を見ると、安閑・宣化両天皇の母は「元妃」の尾張連草香女・目子媛（またの名、色部）であり、これを越前と結びつけるのはむづかしい。地縁の点でそれらしいのは「次妃」の三尾角折君妹・稚子媛である（三尾は近江とも越前ともいう）。男大迹の父王は近江高島郡三尾に在り、越前三国坂中井の振媛を妻問うた。男大迹は母の本郷で成長したという（福井県坂井市丸岡町）。ちなみに「照日」は天照大神や巫女に縁りの名づけである。謡曲「葵上」にも同名の梓巫女が登場する。

- (9) 近江は水上の文学的原郷。たとえば先に『湖の琴』昭和四十一年があり、今は『櫻守』を連載中であつた（『毎日新聞』四十二年九月より十二月）。『櫻守』の終景が湖北海津の大桜である。

- (10) 『櫻守』の主人公の場合も同様である。前稿「桜守一途―水上勉の新聞小説―」、神戸親和女子大学『教育研究センター紀要』第四号、二〇〇八年七月に述べた。

- (11) 財団法人名塩会編著『名塩史』、長濃丈夫執筆、一九九〇年。

- (12) 中山氏前掲書による。長濃氏は読点を追加して引用。

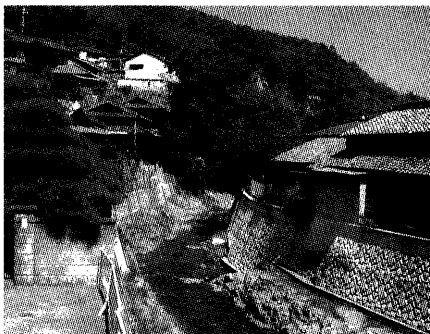
- (13) 億川撰三「名塩製紙の祖、東山弥右衛門と頼の伝説」、杏林温故会「医譚」第十二号、昭和十七年四月。

- (14) 億川説は要するに弥右衛門は村民の大恩人であり、頼の聖人だといふのである——これは真の郷土愛にあふれた、医学者らしい勇気ある発言であつたとわたしは思う。頼者の強制隔離が行われたのがまさに昭和十五、十六年であつた。撰三氏は大阪で医を開業し、皮膚科泌尿科が専門であつた。幕末の緒方洪庵夫人八重の父億川百記の曾孫にあたり、次子寿岳氏文中の億川医師である。注11「名塩史」によれば、億川家も百記の頃は医業の傍ら紙漉きを営んでいた由。なお億川説を追認した文献に、梅原忠治郎「撰津名塩の紙祖東山弥右衛門のこと」、東京名墓顕彰会「掃苔」十一巻七号、昭和十七年七月がある。

(15) 寿岳文章・静子『紙漣村旅日記』、昭和十九年〔引用は二〇〇三年覆刻版による〕。

(16) 江戸時代、四国遍路は癪者救済の最後の場所であった。たとえば立川昭二『日本人の病歴』一九七六年を見ると、「癪病には四国・九州のような温暖の地がいいといわれ、四国はまた遍路の信仰もあって、癪乞食の徘徊するところとなっていた」とあり、癪病の瀰漫は、近世前期〜幕末期の諸書に奈良般若坂に病者が群居する村があると見えることや、享保年間に特効薬の大風子が長崎に大量に輸入された記録があることなどから知られるという。その他の文献に、酒井シヅ『病が語る日本史』二〇〇二年や、近代に関する『近代庶民生活誌』第20巻「病氣・衛生」一九九五年の酒井氏の解説などがある。

(二〇〇八年十月二十六日)



写真上、現在の名塩川。

下、名塩中山の東山弥右衛門碑。

二〇〇八年九月九日撮影。